

選乃以王爲平道軍將出鎮岐州其年除稷州諸軍事稷州刺史峻軒戎塗閩景山之靈雨建神臨境爾夢洎之  
雄風照以秋陽流之各爰坐棠所以垂詠伐枳於是興謠四年除并汾靈遼大榆七州諸軍事并州總管以善政  
入爲太府卿加石光祿大夫檢校兵部尚書大哉元氣制之者鼎臣赫矣天臺參之者國器六材奮務八空分司  
蜀劍駭其光芒鄭履騰其聲寶固已道高損益効彰出納者焉九年除使持節大都督揚潤常和楚方滌七州壽  
茂越括欽宣舒循巢九州都督諸軍事揚州刺史連李居綜兵之禮獨坐受班係之任俗變偷生人無戰死義陽  
之枚涼部威化臨遠太原之許部忠謀帝貞觀元年入爲將作大匠兼散口常侍東園使口藻稅擬華南郊  
陪乘紹璫絢美神居博敞無慙百部之吏武庫縱橫自表一時之傑尋轉宗正卿餘官如故既而留神口表探至  
顯於鳴謙屬想帝先靈炯誠於知止赤松可仰紫又非榮巖廊逾峻屢竭叫閭之請輪靈載嚴未允挂冠之志王  
事非節讓備陳誠懇有感皇懷方優啟扶加光祿大夫歲時朝請防閭祿賜並同京官望極尊榮臣惟爽麗門施  
榷板地兼山水雲華春苑登紫臺而肆日月淨秋軒避綺筵而命筆玳簪極滿玉樹生光陶陶然不覺萬物之爲  
細也聖上以至口馭寓大明踐極丕承景歷率由舊章誠仁宗臣首命儀台之秩迺騰尊屬獨荷升輿之恩貞觀  
廿三年又下詔授開府儀同三司車同畫鹿服授文鱗居此達並俾其終吉庶雍宮執爵齊乞言之大禮靈里鳴  
鑿奉升中之壯觀登天華等夾日成災遽以高亭之敬空祝夢止之壽以永徽二年五月薨於私第時年七十三  
惟王德包上善道邁中庸揭日月之鴻暉疏風雲之逸氣滄乎川鏡嶽然山峙管籥內巖菁華外發抑揚賢哲父  
蹈功名之軌枕席丘壑不求章句之業孝敬莫極地義爲重友悌兼資天倫斯穆蘊奇略懷遠圖詞賦藏牙藝優  
摧靡分毫受律一訊非其務醴酒投膠三軍被其德出蒞藩岳美政治於胡謳入司元凱雅舉光於朝列觀有扈  
而取則深懼滿盈聽鳴弦而告老言追閑躅位鄰中口敬賢之口不渝景側下口樂善之心彌固不夷不惠非吏  
非隱含元自守居榮待終所謂皇室之羽儀鼎門之標榜者矣而電驚虛騰瞻影而不留星口德德門託龍光

而遂遠悲夫以永徽二年歲次辛亥十月庚寅朔八日丁酉詔陪葬于獻陵贈司空使持節都督荆岳朗四州  
諸軍事并賜東園秘器儀仗送至墓所先是主上舉哀于別次禮也子少府監柱國臨川縣公德懋鳳州刺史廣  
川縣公義範懷州刺史上柱國文暕等並擢為藩枝自分華于棟屏呈材邦幹方演慶于槐庭而窮慕艱情隨籍  
露而涵積庶先獻懿範將日月以曾懸故旌美玄廬圖芳翠琬俾夫峯顏峴曲寄沉石以流芳室毀滕城位金生  
而表綱詞曰

靈巖崇構絲絲茂緒祥叶壽丘社光華渚地德攸薦慶靈斯仁天秩逾繁人英克譽一肇口磐石大啓維城藩  
枝表式口萼標崇地隆亢蔭道茂口平惟良緝譽樂善馭聲<sup>早</sup>馭俗垂範威邊作鎮惠政霜明德音雷震王符崇  
博繁機巖峻列岳弘風括河疏濶<sup>其</sup>無私逾洽聖澤彌深緬惟賢口遐覽口既辭榮祿王誠滿捐金貞風有勳雅  
俗攸欽<sup>其</sup>鳳邸臨年獲嶽誓曙軒蓋盈列歌鍾在御寒菊浮香春莫柳絮四美攸極百齡多豫<sup>其</sup>川驚箭水景迥  
輪囷王摧梁竹珪落雪椅應滋帶草流澗書思寂寥陳跡身髯崇規<sup>六</sup>地迹文園堊通神闕梓庭杳露松阡無沒  
寒木<sup>七</sup>嘯風荒墳思月琬字無昧金聲靡歇<sup>七</sup> \* 一字神符」の三字を加える。

### 「李神通」補遺

1950. 4. 17

一九七一年に「李神通」上下、「唐の太宗」を書いたが、その後「陳寅恪先生論集」（中央研  
究院歴史語言研究所特刊之三・一九七一年五月）、羅香林『唐代文化史』（一九六八年三月三版  
李樹『唐史考辨』（一九六五年）などを請んで、前記拙稿を補正しなければならぬことを知っ  
た。そのうち「李神通」にかかわるものを、「二」に記しておく。拙稿についてのページ数は『李

質研究』通卷のそれである。

拙稿(一〇一—一〇〇)では、唐の高祖李淵の七世の祖を涼の武昭王李暠と見、暠以後の世系をたずねた。これは新旧『唐書』などの正史によつたのだが、陳氏の「唐代政治史述論稿」に「李唐氏族之推測」に「李唐氏族推測後記」に「三論李唐氏族問題」ではこれを疑い、次のようにいふ。

1 李唐は李初古拔の後裔であろう。

2 一そうしてその先世は河北趙郡の名家李氏の一支部の零落した者であるが、あるいはそのよゝうに自称するものであつたらう。

3 唐書を開いたのち帝皇を權威づけるため、その出身を隴西、その祖先を李暠と称し、系譜行製の過程で、李初古拔を李暠の孫重耳と、初古拔の子李買主を重耳の子熙とすりかえたのだらう。(初古拔は後魏の弘農太守、買主は金門塲の成主)

陳氏の考証は信すべきもののように思われる。唐書を開いたのち李氏が隴西李氏の後だと称しても、そのいつわりであることは、人は口にしなくても知っていたであらう。

陳氏の論文が『唐會要』をひいていうように、「李熙」の墓である建初陵と、「李熙」の子天賜の啓運陵は、趙州昭慶縣界にあつた。このあたりは李神通が劉黑闥と戦つたときの戦場の範圍にあつたであらう。

一一一ページで、神通の死んだ月日も行年も新・旧『唐書』のいずれにも記さぬと書いた。これは失檢で、旧書太宗紀貞觀四年の条に「十二月辛亥開府儀同三司淮安王神通薨」とあつた。辛亥は二十一日である。行年は記さない。「李壽墓誌」は「春秋五十有四」といふが死日を記さ

ない。二つは相補う。なお「唐李昇墓発掘簡報」に「李昇（字神通、公元五七七一六三〇年）とする。貞観四年十二月二十一日は陳垣「二十史朔閏表」によつて繰ると西暦六三一年一月二十七日が二十八日にあたるようである。五七七年は北周武帝の建徳六年に当る。従つて、これ以後の拙稿記事中の神通の推定年齢は訂正しなければならぬ。

神通の諱が「壽」であり、「神通」は字であることが、「李昇墓誌」で明らかになつた。ところが正史はいずれも「神通」が諱であるような書き方をしている。『全唐文』巻一、高祖「遺淮安王神通安撫山東詔」、卷四、太宗「加淮安王神通燕郡王藝開府儀同三司詔」にもやはりそのような書き方がみえる。

神通の弟神符の墓誌は「諱神符字神符」とある。『唐書』を讀んでみると、諱と字の同じ人、字が諱のように通用した人、あるいは諱が字のように通用した人などが時々出てくるが、その理由がよくわからない。神通と神符の場合、その字の対応から考えて、神符にも、神通にとつての壽のような一字の諱があつたにちがいない。それを墓誌ではなぜいわないか。

神通兄弟と高祖とは従兄弟である。たがいに字でよびあつたであろう。「安撫山東詔」は武徳元年のものである。この年、高祖は天子として即位したとはいへ、それは仲間うちだけのものである。形の上では臣下である相手でも、そう気軽に実名では呼びにくい相手があり、神通兄弟もその一人だったのではないか。太宗にとつては叔父である。いよいよ実名ではよびにくかつたであろう。それが負けすぎらいの太宗にいよいよ神通をおさえつけたくさせたのではあるうが、神符は神通よりはせわたりがうまかつたようである。太宗の氣性を呑みこみ、字を実名とすることによつて

臣下であるかれをなお宇でよびつづける「皇家」の体面をつくらったのではないか。神通も神通の子らもその配慮が戻らないために太宗にうとまれたのではないか。(あるいは神通の例にこりて神行らがつつしんだのかもしれぬ)。だが神符が太宗に重んぜられたかというところではない。太宗曰く、朕の官を授くるは、必ず才行を択ぶ。若し才行至らざれば、たとひ朕の至親なるもまた虚授せず。襄邑王神行これなり。若し才適するところあらば怨讐といえども棄てず。魏徵等これなり。(旧唐書卷六五、長孫無忌伝)

まあそれでも、殺されなくて幸だった。

## 二〇世紀の李賀 (五)

1975.4.18

朱自清

朱自清の名を知ったのは周蘭風『詩人李賀』(民国二十五年六月)に「李賀年譜」が引いてあったためである。周氏の本を買ったのは一九四〇年七月二十三日で、それからあまり日をおかすに朱氏の「李賀年譜」を筆写した、と思う。わたしはこの年譜をひそかに「未譜」とよんでいる。「未譜」は『清華學報』第一〇卷第四期(一九三五年十月)に掲載された。同誌第一卷第一期(一九三六年一月)に「李賀年譜補記」がのった。一九六二年九月、香港から朱自清『文史論叢』が出版された。「陶淵明年譜中之問題」「未譜」「補記」を一本にまとめたものである。わたし

はこれを買った。そのうち「朱譜」「補記」のみを一本としたものを見た。周誠貞『李賀論』(一九七一年一月)には「朱譜」「補記」を付録する。以下、「補記」をも「朱譜」に含める。

「朱譜」は、李賀を本気で読もうとする人ならみな手もとにおいている基本図書だから、いまさら紹介するまでもない。けれども、李賀研究者が「朱譜」を徹底的に再検討しているかというところ、どうもそうはいえないようだ。わたし自身が「北中寒」を書くと、李賀潞州滞任時の昭義節度使が鄒士美であることゝさがしあてたつもりで「朱譜」を見ると、すでにちゃんとあげてあった。これからは、そう「朱譜」を読み直さねばなるまい。ここでは問題点をすこし。

父習肅、邊上從事、貞元九年(七九三)には陝東の令となつて、これを岑仲勉『唐人行第録』草森紳「李長吉伝・垂翅の客」がいい。拙稿「馮小憐」末尾の「楞伽」追記、「負薪」に  
もいふ。

八德宗貞元六年庚午(七九〇)賀一歳、賀當生於是年、賀の生年に三説あることを拙稿「白玉樓中の人」にのべた。わたしは貞元七年辛未(七九一)説だが、なかなか決定はできない。

八貞元二十年甲申(八〇四)十五歳、ここに『新唐書』李益伝の「貞元末、名与宗人賀相埒」を引いたが、聞一多が李益は八〇四年には「五十七歳、成名已久。時賀年纔十五、益伝乃称益名与賀埒、似非信史」と疑い、朱氏は「新唐書名与賀埒一語、旧書作「与宗人李賀齊名」、若不知其所換、といぶがかる。これは拙稿「三長吉」でいったように李益と名をならべたのは長吉Bだと考えれば、怪しむことはいらなくなる。そうして朱譜から李益伝を削ればよいことになる、とは

いっても名声や評判は不特定の多数者の間で浮動するものだから、それを決定することはむづかしい。

△元和二年丁亥（八〇七）十八歳 下野縣在是年▽ このときのかれの年齢を十七歳と見、父百庸の死を元和三年三月以前とみることもできよう。なおこの年の説明の中、楊敬之について△新書一六一▽というのは△新書一六〇▽の訛だろう。

△元和三年戊子（八〇八） 尊洞壑詩當作於是年▽ 朱氏は「新書」「通鑑」に見える尊洞壑三次の寇のうち七九四年は尊五歳、八一六年は尊の死の年だから、このころ八〇八を当てた。しかし、尊が八一七年に死んだのなら、八一六年に「尊洞壑」を作ったとしてもよい。なお、いまのこの史書に記さぬ尊洞壑の寇がいくらかもあつたはずである。この詩の作時はきめにくい。

△元和五年庚寅（八一〇）是年尊意爲河南令。尊應河南府試。作十二月祭詞。獲雉。冬。舉進士入京。是年尊意有蒸河南府秀才詩▽ この尊詩に「元和五年冬、房公尹東京」の句がある。この房公は房式で、「旧書」真宗紀によれば元和四年十二月壬申朔に陝統觀察使から河南尹となり、五年十二月癸酉に宣州刺史宣歙池觀察兼石軍等使として去り、壬午に鄂岳觀察使鄒士美が河南尹に転じている。府試合格者が長安における礼部の試験を受けたかどうか、受けて及第したか落第したかは、河南尹にとってかなり大きな関心事であつたろうから、房式も鄒士美も、李賀の名は記憶にとどめたであらう。元和六年辛卯（八一〇）の春には賀は奉礼郎となつてゐるようだが、河南府管轄下の人が新任されて中央の役人になるとき、その長官の河南尹にあつてゐるはずである。

△王鳴盛疑質以恩蔭得官、近之▽ 恩蔭を以て官を得、とけ祖先の功勞による恩典によつて官に就くことである。これを蔭補ともいう。△質の近い尊族には蔭補のもとになるような人物は尠見されない▽（斎藤暁『李賀』）とこれを疑う説もある。決定的なことはいえないが推測の材料がないわけではない。質の父晉肅は貞元九年（七九三）に陝東の令だつた。位階は従六品上。死んだのが元和二年（八〇七）だとすると、十四年のちである。死ぬまで官吏をしていたかどうかはわからないが、官吏のままだったら三階級あがつて従五品下になっていた可能性はある。それならその子は九品の官に蔭補されうる。奉礼郎は従九品上である。

△王濬墓下作詩當作於在潯州時。濬墓在魏州恆農縣（今河南靈寶縣南）、質殆于役其地而有是作、……▽ 元和十一年の条に上のようだが、わたしにはほとんど解しがたい。

さて『未自清全集』（一九六六年）巻頭の小伝によればほほ次の通り。

未自清 字は佩弦、原籍は浙江省紹興縣。清の光緒二十四年（一八九八）陰曆十月九日、江蘇省江都縣に生れた。民国九年（一九二〇）北京大学文科哲学門を卒業。浙江、江蘇両省の師範学校や中学の国文教員のうち十四年（一九二五）清華大学中国文学系教授となり、ヨーロッパに遊学し、三十七年（一九四八）八月十二日、胃潰瘍のため北平病院で死んだ。文学業績では殊に散文にすぐれ、文字精練で一字を増減しえない。最初の著書は詩文集『踪跡』、その後『背影』ヨーロッパ旅行中の『欧遊雜記』、『雪朝』、『你我』、『倫敦雜記』等がある。晩年、研究に従事し、『詩言辨志研究』、『經典常談』等がある。

この全集には、研究上の作品、たとえ「詩言辨志研究」や「李賀年譜」をのせない。

わたしは、かれの詩文のよい読者ではない。しかし、旅行記と詩の一部を読んで好ましく思った。

かれが「陶淵明年譜中之問題」を書いたのは一九三四年で三十七歳、「李賀年譜」を書いたのがその翌年で三十八歳である。一九三五年、わたしは中学五年生で、すでに李賀のことを同級の森田晴平にしきりに言いふらしていたが、朱氏のことにはまったく知らなかった。一九四八年、かれが五十一歳で病死したとき、わたしは新聞記者をしていたけれど、そのことを聞き知った覚えがない。秋岡家榮が同僚だったが、わたしは勤め先で中国のことをあまりしゃべらず、李賀のこととは言ったこともないように思うから、秋岡は朱氏のことを知ってもわたしには語らなかつたのかもしれぬ。

朱氏は、李賀をゆかりとして一方的に知っている人にすぎない。しかし「李賀年譜」を読むと、  
你的手像火把，

你的眼像波涛，

你的言語如石頭，

怎能使我忘記呢？

(贈A・B)

と呼びかけたい気がせぬではない。朱氏は笑うだろうか。

遠山又四郎『譯註李長吉詩集』は昭和八年三月二十五日東明書院発行で発行者は東京市本郷区  
明込千駄木町五十番地伊藤泰一郎である。伊藤は東明書院の社長である。

昭和八年は一九三三年だから未自清の「李賀年譜」の発表される二年まえだ。この本は日本語  
で書かれた李賀の詩集の訳註の最良のものだ。序の全文を左に掲げる。

陳文燭曰く、易を善くする者は占はず、詩を善くする者は説かずと。予は詩を善くする者に  
あらずるなり、かるがゆゑに詩を説かんとする者なり、而も善く説くことを能くせざる者な  
り、詩を善くせじ、善く説くこと能はざるが故に卻つて益々詩を説かんとする者なり。詩を  
善くし、善く説くに到りては月を指す指を忘るるの時なり、天を仰げば月明し、何ぞ指すこ  
とを用ゐんやとは、予が年來の志願なり、されども暗雲の月明を掩ふにあたりては、之が拂  
刷を念はざるを得ざるなり、此の李昌谷詩の譯註は、其拂刷を試みたるものなり。曩に予、  
陶詩を讀んで、世念稍薄らぎたりき、次に杜詩を讀んで、何等か教えらるるものありて沈思  
黙考に耽りたりき、次に李太白詩を讀んで、飄々浮世の外に遊ぶの思ひありき、今李昌谷詩  
を讀んで、眞の歌詩を知るの概あり、而も善く解し得たりとする三四のものにありては、陶  
・杜・太白にも未だ味はざりしものありて、思はず驚喜、知らず識らず座を立ちて飛躍す  
ること度々なりき、今、古人の李昌谷の詩評數十則の中の一二を記して序に代へんとす。  
\*「ところは十中の四五に止まりて、未だ其の半ばにだも達せざるなり、而るに其の解し  
得たりとする」を挿入。

宋の諸公、唐人の詩を評して云く、太白は仙才、長吉は鬼才と。譯註者謂ふに、仙といひ鬼

といふ。これ世に多く有らざる所以と。漁隱叢話に曰く、李長吉、玉川子の詩、皆離騷より出づ。未だ以て立談して判すべからざるなりと。或ひと陸劍南に問うて曰く、李長吉の樂府古今の工を極む、具眼或は未だ之を許さず何ぞやと。劍南答へて曰く、長吉の詞百家錦納の如し、五色眩曜光り眼目を奪ふ、人をして敢へて熟視せざらしむと。譯註者謂ふに、敢へて熟視せば、驚駭飛躍せん。周紫芝曰く、李長吉の語奇にして怪に入ると。譯註者謂ふに、奇にして怪、これ鬼才なる所以と。「高軒過」に所謂、筆は造化を補つて天に功無しと、卻つて長吉自らの詩才を謂へるなるべし、歌詩の偉なる所以、殊に長吉の歌詩の偉なる所以。もし強ひて「李昌谷集」を以て日本の家集に比較をもとめなば、最も當を得るは蓋し「金槐集」ならんか。睿朝は二十八歳、長吉は二十七歳、共に短命にして共に歌詩に長ぜる奇とすべし。唯睿朝は一族に殺され、長吉の死は天の引接するところとなるの異なるのみ、亦一奇なりといふべし。李賀年譜無く、其の生死の歲月を知るに由無し、唯だ杜樊川の太和五年の序に、賀生れて二十七年にして死す、又賀死後凡そ十有五年の語あり、依りて、徳宗の貞元七・八年の交生れて、憲宗の元和十二・十三年の交に死せるものとせば、李長吉歿後、凡そ千百二十年の後世、日本の昭和八年二月、漆山又四郎識す

李賀にとりつかれた人の心はずみそのままに流露されたような文章である。文中の陶、杜、李白の訳註はいずれも岩波文章となつてゐる。このほか上田秋成の『春雨物語』もこの人の校訂で出た。幸田露伴の門下らしく、岩波茂雄とよほど親密だったようだ。この人の訳註はどれも評判がよくない。中野重治がくさしてゐるのをどこかで讀んだ記憶もある。専門の学者はおおむね

歯牙にもかけぬ趣きだった。若僧の無知なわたしなどでも、ちよいちよいあやまりを見つけた笑ったものだ。けれども専門の学者が李賀についてどれほどの作業をしたかというところにはまだほとんど何もなかった。

久保天隨は青年時代、李賀について一篇の論文を書いていろいろらしい。かれは『唐詩選』全部の註釈を出版している。『唐詩選』などは他人にまかせて『李賀集』を註釈すればよかったのだ。かれは流行児だったのだから、書けば李賀を毛すじほとも知らぬ出版者でも刊行しただろう。

漆山と親密だったらしい岩波が、陶淵明・杜甫・李白を出しながら李賀を出さなかったのも象徴的だ。

さきほどわたしは東明書院の社長の住所氏名まで記したのは、そんな李賀の本を思い切って出版した誉れを顕彰したいと思ったからだ。

岩波が荒井健『李賀』を出したのは昭和三十四年。四分の一世紀おくれる。

わたしが眞光校『李長吉詩集』を手に入れたのは昭和九年か十年で、北野天涵宮の夜店で買った。漆山訳註を手に入れたのはそれから一年ぐら以後、面陣の古本屋で買った。

漆山は「凡例」に入此書譯文の下方、餘白ありて……間が抜けて見えるであろう、併しこれは譯註者の好みで態とした事である……此の書を手にし読んだ方は、己がずし評語なり註の不足なりを餘白に書き入れて欲しいVと記した。わたしは馬鹿正直にその余白にごたごた書き入れた。その後古本屋で時々この本を見かけるが、わたしのような馬鹿はいなかった。

漆山の経歴等については、ここに記した以外のことゝわたしは知らない。

昨日、前の行まで書き、きょう『日本人物文獻目録』（平凡社・昭和四十九年）を見たら、

▲漆山又四郎▽黒江太郎 山塊発行所 昭36

▲編集者の回想録 二九 漆山又四郎▽ 図書 四四 昭28

をあげている。読む機会が死、なら、その折また紹介したい。

1975.4.21

▲雜記・77V 美 感 年 考 選

1975.4.21

一九七五年四月一日、江崎郡さんからの前日付の手紙を受けとった。福建語で李長吉歌詩卷一（真正子註本の本文のみ）を録音したカセット・テープが向封してある。北京音では聞けない入声がある。まり聞こえ、文字によ。ては日本に伝わらな。たいへん興味ふかい。手紙には、

……李長吉研究の目録にあつた宋元通志の「文藝地理学」といつのを入手しました。ほとんど

が心理学的見地より解釈した美学と一つのものでした。第六巻で予買の詩を引用した所などが

あり……等してあります。どうもおにはすくには納得の行く文章ではありませんのですが

とい。て、その第六巻を幾手等思から、次の文章が抄出されてゐた。

這些攻撃聯想的詩都假言之成理、但是終有不能入心處。換一個觀點看、夢想對於藝術的重要實在不能一概抹殺。因為感覺是想像部以發覺詩要素。無論是創造或是欣賞、知覺和想像都必須活動、尤其在詩的方面。……詩人在做詩時、自己忽然彷彿在夢境裏遊玩、還要設法「催眠」讀者……這

個道理法國美學家Paul Souriau La Suggestion dans l'art 裏說得最清楚。我國胡景翼研究法國象徵派的理論、可以更加明瞭詩和夢想的關係。……書「Correspondances」